

## 5.1chの表現力

サラウンドが当然・・・もうステレオには戻れない

「音楽はステレオで十分」。そういう話を耳にすることがある。確かに「5.1chサラウンドで音楽を聴く」というと、まず想像するのはコンサートの録音。客席にいたような「臨場感」が味わえる…？。

でもサラウンドで聴いたことがなくてもなんとなく想像できてしまうあたりがツマナイ。大体、ステージ上で行なわれているコンサートを、わざわざ5.1chにする意味があるとも思えない…。

そういうことを考えたことがあるなら、まず付録DVDの最初に収録されている曲を再生してほしい。

### 付録DVDの聞き方

残念ながら映像は付いていないが、音声はきちんとドルビーデジタル方式で記録された5.1chのサラウンドだ。

リスニング・ポジションはあまり気にせず「6つのスピーカーで囲まれたラインの中ならどちらを向いても良い」というつもりで気楽に。

ただし、再生には2chの擬似サラウンドではなく、必ず「DOLBY DIGITAL」に対応した「本物の5.1chサラウンド・スピーカーシステム」を使用すること。

PCで再生する場合は再生ソフトも5.1chに対応している必要があるので注意が必要だ。

### 「サラウンド」でできること

今回収録している、20のプログラム（各1～2分程度）は、19世紀末～20世紀の作曲家の作品とオリジナル作品、合計8曲の中から少しずつピックアップしたもの。

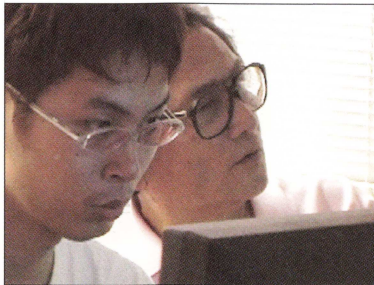
いずれも「完成版」ではなく、現在制作中のバージョンなのだが、音楽としての完成度は驚くほど高い。

どの曲も、サラウンドをいわゆる「飛び道具」として使うのではなく、ごく自然に利用している。

しばらく聞いていれば、5.1chの表現力と可能性の大きさにも気付くはずだ。

今回作品を提供してくれたのは、尚美学園大学音楽表現学科音楽メディアコースに在学中の作曲家たち。

本誌2001年9月号で取材させていただいた、山口氏と野尻氏の2人に、稲毛氏、大嶋氏を加えた4人。



↑収録用のデータを切り出し、6chにミックスダウンしていく。要所で富田氏のアドバイスが入る

全員があつた富田氏の門下生である。

サラウンドの第一人者である富田勲氏が、そのノウハウを惜しみなく公開してくれる…という恵まれた環境の下で、自分自身の表現を追究していった結果のひとつが今回の曲だ。

これらの楽曲は、DTM音源を中心に数種類のMIDI音源モジュールだけで作られており、生楽器は一切使われていない（MU2000×1台だけで作られている曲もある）。

つまり、これらの曲において、サラウンドによる「臨場感」は「再現された」ものではなく、アニメやCGのように「作り出された」ものなのだ。

### サラウンド化の方法

前述のように、これらの曲はすべてMIDI音源で作られている。現時点では5.1ch対応のMIDI音源は存在しないので、2次元平面上での「音の配置」はサラウンドに対応したオーディオ編集ソフト上で行なわなければならない（今回の曲ではスタインバークの「NUENDO」が使われている）。

要するに、MIDIシーケンサー上ですべての素材を作って調整した後、トラックごとに再生してオーディオ化（「NUENDO」で録音）する必要があるということ。各楽器の定位や音量の設定、エフェクト等の調整はそこから始まるのだ。

とはいえ、1度こまごまと作ってしまえば後工程は普通のステレオとそれほど変わらないようだ。

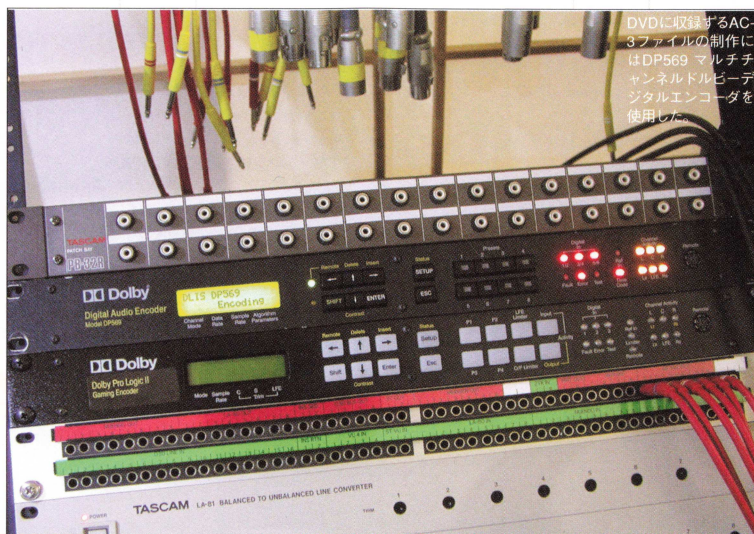
### 収録曲のマスタリング

今回の収録では、発売予定の「NUENDO」用AC-3（ドルビーデジタルの音声圧縮形式。5.1chまで対応している）プラグインを利用する予定だった（「NUENDO」から直接AC-3を書き出せるのでかなり便利だと思う）。

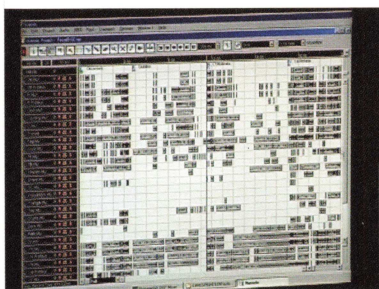
残念ながらこれが期日に間に合わなかったため、まず一人あたり数十ギガバイトにもなるマルチ・トラックのオーディオ・データを（ハードディスクごと）持ってきていただき、収録する部分

を「NUENDO」上で6chにミックス・ダウンするところからお願いすることになった（データのとりまとめでは、スタインバーク・ジャパンにご協力いただいた）。

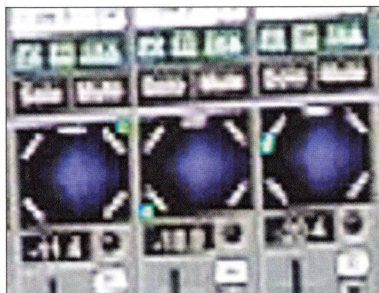
さらに同社の紹介でドルビー日本支社に協力いただき、AC-3へのエンコードは専用ハードウェア（マルチチャンネル・ドルビーデジタル・エンコーダ「DP569」）で行なっている。



DVDに収録するAC-3ファイルの制作にはDP569 マルチチャンネルドルビーデジタルエンコーダを使用した。



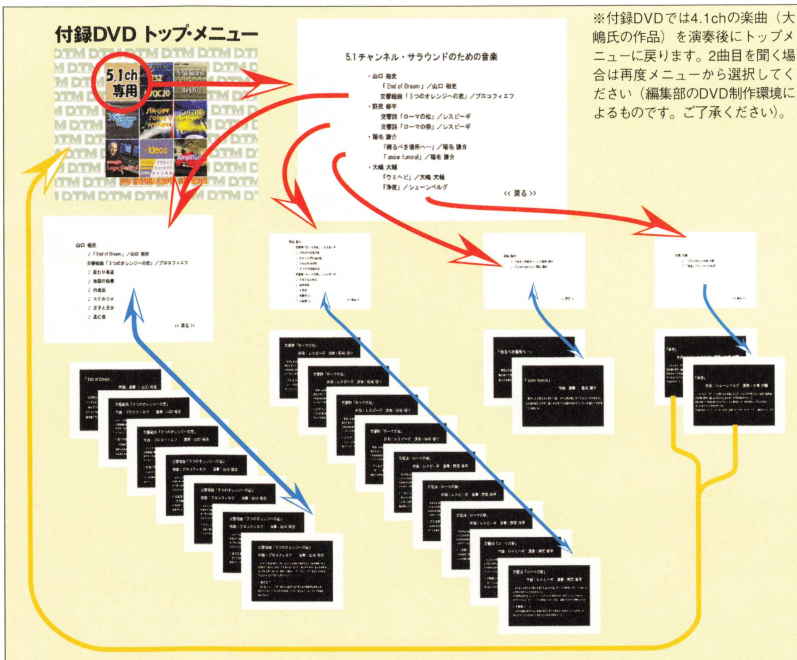
↑ サラウンド用データを作るには、まずMIDIデータを楽器ごとに再生して「NUENDO」に取り込む作業が必要。時間もそれなりにかかる。



↑ ミキサーの表示部分を拡大したところ。青い円の周囲に見える緑色の点が定位を表わしている。



サラウンド+打ち込みで、音楽の常識が変わる。



※付録DVDでは4.1chの楽曲(大嶋氏の作品)を演奏後にトップメニューに戻ります。2曲目を聞く場合は再度メニューから選択してください(編集部のDVD制作環境によるものです。ご了承ください)。

### 流れは戻らない!

「富田勲氏のお話をうかがうとテーマパークや、万博などのパビリオン、博物館などでは、ずいぶん昔から「サラウンドが当然」という状態だったらしい。ただ一般家庭用では、サラウンド再生環境がなく(発売されていたが、高価で普及しなかった)、「サラウンドの楽曲は作っても再生してもらえない環境がない」という状態が続いていたのだ。

しかし、ここ1年ほどでDVDビデオが大きく普及し、5.1chのデコーダーとスピーカーのシステムも、2~5万円程度で買えるようになっている。

状況は変わった。「富田勲氏」30年以上も前からこだわり続けてきた「サラウンド」の世界が、おかげさ言えば、人類史上初めて「当り前のもの」になりそうなのだ。

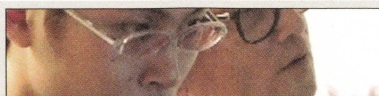
実際、今回の曲を聞いて、楽器の音が周囲から聞こえても、それほど違和感がないことに自分で驚く人もいると思う。しばらく聞いた後、普通のステレオを聞いて、もの足りなく感じる人もいはずだ。「どうして、このギターは右から聞こえないのだろう」、「どうしてこのバイオリンは後ろにいないのだろう」というように。

今回取材した4人は、作曲の段階から楽器の配置をサラウンドで考えているらしい。

「音楽はステレオで十分」と考えてしまうのは、再生装置に慣らされているだけでなく、生楽器の演奏形態に縛られているせいかもしれない。



今回紹介した曲はいずれもDVD発売が計画されている。詳細が決次第本誌でも報告する。



### 山口 裕史

評価の高いオリジナル曲に見られる独自の視点で、プロコフィエフのアレンジにも十二分に活かされている。

山口 裕史 「End of Dream」/山口 裕史  
交響組曲「3つのオレンジへの恋」/プロコフィエフ

作曲家	曲名
山口 裕史	End of Dream
プロコフィエフ	交響組曲「3つのオレンジへの恋」
	①変わり者達
	②地獄の情景
	③行進曲
	④スケルツォ
	⑤王子と王女
	⑥逃亡者



### 野尻 修平

「ローマの噴水」を加えたレスピーギ「ローマ三部作」の完成間近。オリジナル曲のサラウンド化も進行中。

野尻 修平 「ローマの噴水」/レスピーギ  
交響組曲「3つのオレンジへの恋」/プロコフィエフ  
交響詩「ローマの松」/レスピーギ  
交響詩「ローマの松」/レスピーギ

作曲家	曲名
レスピーギ	交響詩「ローマの松」※1
	①ボルゲーゼ荘の松
	②カタコンブ付近の松
	③ジャンニコロの松
	④アッピア街道の松
レスピーギ	交響詩「ローマの祭」※1
	①チルチエンセス
	②五十年祭
	③十月祭
	④主顕祭 (1)
	⑤ ♪ (2)

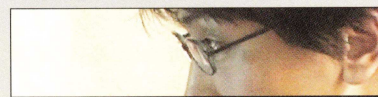


### 稲毛 謙介

「自然」の厳しさや優しさを感じさせる、穏やかで個性的な曲。サラウンド化を待つオリジナル曲多数。

稲毛 謙介 「帰るべき場所へ...」/稲毛 謙介  
稲毛 謙介 「snow funeral」/稲毛 謙介

作曲家	曲名
稲毛 謙介	帰るべき場所へ...
稲毛 謙介	snow funeral



### 大嶋 大輔

「ウミヘビ」はギター、「浄夜」はストリングス。いずれも「1種類の楽器」をサラウンドで表現した作品。

大嶋 大輔 「ウミヘビ」/大嶋 大輔  
シェーンベルグ 「浄夜」/シェーンベルグ

作曲家	曲名
大嶋 大輔	ウミヘビ※2
シェーンベルグ	浄夜※2

※1 収録楽曲は制作途中のもので、リアスピーカーの低音成分が、一部サブウーファーからも出力されています(サブウーファーの音量を小さめにする、楽器の定位がより明瞭になります)。  
※2 センタースピーカーを使用しない「4ch+サブウーファー」構成です。